

「神の国に入るには」(ルカによる福音書一八章九〜一七節)

1 神の国に入る

このところ、説教では、〈神の国〉が、くり返し取り上げられています。もちろん私自身がこれを主題として取り上げようとしているわけではありません。あくまで聖書本文がそれを示しているのです。

実際、ご承知のように、この〈神の国〉という言葉は、新約では、ルカによる福音書に圧倒的に多く出てきます。

ルカでは、ほぼまんべんなく出てきますが、それでも、振り返って見ると、イエスがガリラヤを出て、エルサレムに向かうようになってから(九・五一)、多くなつたような気がします。ここ何章か、とくにそう感じます。

それはどうしてか、考えてみると、一つはこういうことがあるのではないでしょうか。イエスがエルサレムに向かうということは、十字架につけられ殺されるということであり、神の救い、その最終的段階としての神の国が近づいたことです。そのことと無関係でないのではないかと思います。

またもう一つ、こういう側面もあります。エルサレムへ近づくということは、イエスが地上を離れる日が近づくということです。それは、弟子(使徒)たちが、自分たちだけで神の国の宣教を担っていかなければならない日が近づいているということです。でもあります。

そうであれば、イエスの宣教の中心である〈神の国〉、それは何であるか、それと主イエスとの関係、それを彼らはもつと深く知らなければならぬ、十分に知らなければならぬのです。

知らなければならぬ、だけではありません。それを彼らは、生きなければならぬのです。そしてそれを宣べ伝えていかなければならないのです。こうして、ここに来て、神の国は、イエスご自身の口から、くり返し、ていねいに説かれることになったのです。世の終わりまで神の国の宣教をになつていくべき弟子たちの信仰、その成熟と成長、それが、エルサレムに向かうイエスの思いの、イエスの祈りの真ん中にあるのです。

ところで今日の説教題は「神の国に入るには」です。入るにはどうしたらいいのかということですが。

もしかしたら、この「入る」という言い方、少し違和感をもたれる方がおられるかも知れませんが。

というのも、これまで、私ども、先週もそうしたことを申しましたけれど、神の国は一つの場所、空間的な場所ではない、〈神の支配〉、〈王権〉だといってきたからです。「入る」となると、どうしても、ある場所に入る、どこか自分と関係のないところに神の国があつて、そこに入る、入ることが許される、そういうイメージをもちがちだからです。

少し調べて見ると、〈神の国に入る〉という言い方は、じつは多いのです。現に今

日の箇所最後の節（二七節）でも、「入る」という言い方がされていて、その言い方が間違っていないことを示しています。

同時にその箇所には、神の国を「受け入れる」という言葉が使われていることにも注意したいと思います。神の国、それは王たる神の支配です。それは、神の恵みの支配であり、その現実、その力のことです。それを「受け入れ」、そこに立って歩む、生きることが求められているのです。

「入る」というのは、その意味では、適当な言葉ではないのかも知れません。しかし問題は、そうした言い回しではなくて、私どもが、本当に、イエスと共にこの世にきた、私どものところに来ていて神の国の現実に、どのように応答し、どのようにあずかり、それを求め、生きるかということです。それが今日の箇所全体で問題になっていることです。

2 へりくだり

はじめに、イエスのたとえを取り上げます。

自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々に対しても、イエスは次のたとえを話された。「二人の人が祈るために神殿に上った。一人はファリサイ派の人で、もう一人は徴税人だった。ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った。『神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています』。ところが徴税人は遠くに立って、目を天に上げようとせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを憐れんでください』（一〇〜一三節）。

先ほど、この箇所で問われているのは、神の国の現実にどのように応答し、どのようにあずかり、求め、生きるかだと申し上げました。イエスはそれを、たとえをもって明らかにしています。

このたとえにも、一種の前置きがあります。その点では、先週の「やもめと裁判官のたとえ」と似たところがあります。

ただ、前の箇所では、気を落とさず祈りつづけることの大切さを語るためと、たとえの解釈を前もって決めてしまうような前置きでしたが、今日の箇所は、そこまで行っていないです。

いずれによ、ルカは、イエスが、だれに向かって語ったのかを明らかにし、理解の手引きを与えています。

この中に、「他人を見下している人々に対しても」とあります。前の「やもめと裁判官のたとえ」は弟子たちに語られたものでした。それに対して今度は、イエスはファリサイ派の人々に語っているのです。

ただしイエスの周りには、ファリサイ派だけでなく、そもそも弟子たちが、ずっとそこにいたわけで、今日のたとえも、間接的には、弟子たちにも語られていることは

いうまでもありません。

二人の人物が上げられます。寓話ではなくて、たとえですから、現実起こったことが取り上げられています。徴税人のほうは、こういう人がいたかも知れないと思わせるところがありますが、フアリサイ派の人のほうは、祈りの言葉からして、まるでつくられたキャラクターのようにも見えます。

「神殿」は、むろんいろいろの役割をもっていました。しかし本質的には神殿は神の住まいです。そこにいます神に祈りを献げる。神殿は祈りの家（一九・四六）として人々に重んじられていました。エルサレムに住んでいたこの二人（一四節）、境内で、たまたま一緒になったのでしょうか。

祈りです。一緒になったことが、フアリサイ派のこの人には影響を与えたように見えます。徴税人はそうでないようです。二人は、いま自分がどこにいるのか、という認識がまったく違っていました。私がいうのは、神殿にいるということではありません。徴税人は、いまだ神の前にいることを知っています。なるほど「目を天に」向けることはしませんでしたけれど、心が神のみに向かっていたので目を上げることが出来なかったのです。

フアリサイ派の人はそうではありませんでした。「神様」と呼びかけ、「感謝」という言葉も口にしていきます。しかしその視線は、つねに他人に向かっていました。彼ほ自分が「ほかの人たちのようでない」ことを、隣にいる「徴税人のようでない」ことを感謝しています。この感謝は、神への感謝ではなく、まさに「うぬぼれ」でしかなかったのです。

いうまでもなく、祈りにおいて大切なのは、ただ神の前で、神に向けてなされることです。それは教会の祈りも個人の祈りも、礼拝の祈りも同じです。ただ神の前でなされる神への求め、それが祈りです。神の前なら、沈黙も、ため息も、嘆きも祈りです。聞き届けられます。それが二人の違いです。イエスは、たとえば、次のように結論をつけています。

言っておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのフアリサイ派の人ではない。誰でも高ぶる者は低くされ、へりくだるものは高められる（一四節）。

この中の「義とされて」に注意してください。先ほど、「自分は正しい人間だとうぬぼれ」ていたという言葉がありました。この「正しい」と同じ言葉です。自分が正しい、自分だけが正しい、自分たちが正しい、自分たちが正しい、こうした言葉がこの時代横行しています。気がつけば、私どもも、そうした時代の風潮の中で、そうした言動をしがちです。

しかし神の国にふさわしい態度は、へりくだりです。神に対して、そして人に対してのへりくだりなのです。

3 前進する神の国

ここまで見てきますと、神の国の現実とは、地上の国の現実とまさに正反対のところにあることに気がつきます。

自分を正しいとした者は神には正しいとは認められず、「高ぶる者は低くされ、へりくだるものは高められる」のです。それゆえまた、この世で、少なくとも、当時のローマ社会で、軽んじられていたといわれる、子どもたちこそ、イエスによれば、神の国にふさわしいというのです。

イエスに触れていたただくために、人々は乳飲み子までも連れて来た。弟子たちはこれを見て叱った。しかし、イエスは乳飲み子たちを呼び寄せて言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言っておく。子供たちのように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない（一五〜一七節）。

一般に、どんな社会でも、子供が大切にされたことはいうまでもありません。しかし、いつでも、どこでもそうかという点、必ずしもそうではありません。古代ローマ社会、子供は労働力と見なされ、まだ一人前でない子供は、家族の負荷と感ぜられたり、軽んじられたりしていました。

子供の死亡率も高かった時代、イエスに「触れて」もらうために、「子供たち」だけでなく「乳飲み子までも連れて来た」というのは、祝福をえたい、いやしをえたいという切実な思いが現れ出ているようです。子供をいやしてあげたイエスについては私どもすでに知っています（九・四一他）。

弟子たちが妨げた理由は、はっきりしませんけれど、一般に子供が軽んじられていたことの証拠かも知れません。

しかしイエスは、軽んじられていた子供を受け入れられます。イエスご自身が呼び寄せられます。この招きに、何の躊躇もなく、おそらく自分が何をしているかも、当の子供は分らずにイエスのもとに来ます。素直さといったらよいのでしょうか、あるいは信頼といったらよいのでしょうか。自覚もない信頼、根源的な信頼です。受け入れられたことを受け入れる信仰。乳飲み子が母のふところに抱かれて安心しているような信頼がここにあります。子供のように神の国の現実にあずかる者が神の国に「入る」ことができるのです。

さて「神の国」という言葉で思い起こすのは、古代教会の有名な教父アウグスティヌス（354-430）の『神の国』という著作です。それは、「神の国」が、地上の国のものもろの妨げと、もろもろの反対を越えて、その完全な成就に至るまでを、壮大なスケールで描いたものです。アウグスティヌスは、これを、ローマがゴート族の侵入を受け、危機に陥ったときに、真の希望を告げるものとして書いたのです。いま私どもの目にも、時代と社会の危機が見えます。それは神の国の現実を覆い隠そうとしています。しかし神の国は、アウグスティヌスが描いたように、天地創造、神の民イスラエル、そしてイエス・キリストと教会を通して確実に前進していきます。その前進に私ども、個人的なあれやこれを越えて、信仰をもってあずかっていきたい、それが私どもの変わらぬ願い、祈りです

（二〇二二・六・二六）